

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：34453

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11253

研究課題名（和文）看護基礎教育における在宅看護実践力強化に向けた主体的学習方法の確立

研究課題名（英文）Establishment of the independent learning method forward the reinforcement of the practical ability at home health care in the nursing basic education.

研究代表者

宇多 みどり (Uda, Midori)

大和大学・保健医療学部・教授

研究者番号：90552795

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アクティブ・ラーニングの考え方を取り入れた主体的学習の確立を行うことで、看護基礎教育において在宅看護実践力を強化し、新卒看護師による訪問看護の人材育成をねらう期待するものである。反転授業とジグソー学習、問題解決型学習（PBL）の混合学習法と動画による「体験型シミュレーション」を活用した授業設計を行い、退院時から終末期・看取りに至るまでの経時的なシナリオと動画を作成した。

また、経験の浅い訪問看護師14名に対してシナリオを活用した研修を行い、問題解決思考のプロセスを通して知識と技術が統合できるという評価を得た。今後、看護基礎教育での「体験型シミュレーション」を再考し更なる充実を図る。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究により、主体的学習の前提である批判的思考力や社会的基礎力の育成ともなり、在宅療養を見据えた看護への応用力となり得る。また、この主体的学習方法は、訪問看護実習での日々の体験の振り返り学習や現任教育の場においても大学との協働で応用することができる。

また、指定規則改正を受けた2022年からの改定カリキュラム「地域・在宅看護論」での地域特性を生かした看護実践においても、主体的学習の視点から地域看護の視点を含めた教材開発へ応用できるものである。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to expect the reinforcement with practical ability at home health care in nursing basic education by establishing the independent learning that adopted a way of thinking of the active learning and the talent development of the home health care by the new graduate nurse. We designed the class that utilized "the experience-based simulation" with the mixed learning method of reversal lecture and jigsaw learning, and problem based learning (PBL) and so on. Also, we made a scenario and animation through over time from after discharge phase to terminal phase.

Also, for 14 inexperienced home care nurses, we conducted the training that utilized a scenario and obtained the evaluation that knowledge and a technique could integrate through the intellectual process to settling problems. In future We reconsider "experience-based simulation" by the nursing basic education and will enrich the content moreover.

研究分野：地域・在宅看護学

キーワード：在宅看護実践力 看護基礎教育 主体的学習方法 アクティブ・ラーニング 新卒訪問看護師 訪問看護

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

訪問看護師は、単独で訪問し責任をもって対応をしなければならないことから、「新卒で訪問看護は難しい」という慣例が在宅現場・教育現場ともに根強く残っていた¹⁾。当初、在宅現場で、臨床経験のない新卒看護師を教育・育成するプログラム^{2) 3)} やしくみ(組織による公的な地域連携型人材育成)が開発され、新卒看護師の採用と育成が徐々に広まってきていた。とは言うものの、過去5年以内に新卒看護師を採用した訪問看護ステーションは、全国の約3.4%に過ぎなかった。一方の教育現場では、看護基礎教育に新たな訪問看護選択制コースを設ける教育機関での報告⁴⁾があるのみで、正規のカリキュラムで新卒訪問看護師を想定した在宅看護実践力を強化するための教育方法は提案されていなかった。

新卒看護師の採用意向のある訪問看護ステーション管理者は、採用を考えていない管理者に比べて、新卒看護師に高い在宅看護実践力は求めているが、卒業時には、自己課題に向けて自律的に学習できる能力を求めている^{5) 6)}。新卒の訪問看護師に対する調査でも、自律的に学習できる能力は、卒業までに身に付けたい学習活動であることが明らかであり、看護基礎教育での自律的学習方法を確立することの重要性が示唆された。

自律的学習とは、他からの指示に頼ることなく、自分自身の判断や行為にしたがって学習すること、自らの行為を律して学習することである。アクティブ・ラーニングは、1960年代以降に米国で開発された教育方法の総称で、日本では大学教育の質的転換に向けて、能動的・活動的な学習方法として中央教育審議会が2012年に答申している。今回、自主的な学習方法の参考となるため、アクティブ・ラーニングの考え方から示唆を得ることとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、在宅看護教育にアクティブ・ラーニングの考え方を取り入れた主体的学習方法の確立を行うことで、看護基礎教育での在宅看護実践力を強化し、新卒看護師による訪問看護の人材育成をねらいとした。

- (1) アクティブ・ラーニングの実践文献から授業設計の示唆を得る(文献レビュー)。
- (2) 新卒訪問看護師を育むための課題と教育機関の役割についての知見を得る。
- (3) (1)(2)を受けて、アクティブ・ラーニングを導入した授業設計(教育方法や教材開発)と実施・評価から教材を精練する。

3. 研究の方法

- (1) アクティブ・ラーニングの実践文献から授業設計の示唆を得る目的で文献レビューを実施した。医中誌 Web 版および CiNii 論文検索において、過去5年間で「大学教育」、「アクティブ・ラーニング」のキーワードで検索された624件のうち原著論文115件を分析対象とした。
- (2) 過去に新卒訪問看護師としての就業経験者や臨床現場で新卒看護師を受入れ育成されている訪問看護ステーションの管理者等3名の語りから、新卒訪問看護師を育むための課題と教育機関の役割を分析した。
- (3) 授業設計(教育方法や教材開発): 在宅看護関連科目のうち、「地域包括ケアシステム」、「多職種連携の在り方」、「訪問看護過程」、「在宅看護における倫理」の単元において、架空地域に居住する脳梗塞で療養することになった患者とその家族を中心としたシナリオを作成した。また、シナリオは環境から生活者の視点に気付くことができる設定と、退院移行期から慢性・終末期までの経時的な経過を追って作成した。原則として、アクティブ・ラーニングの構成概念を参考に学習の階層は、図1・2とした。

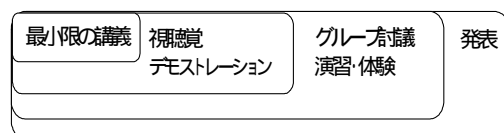


図1. 基本的な学習の階層(授業)

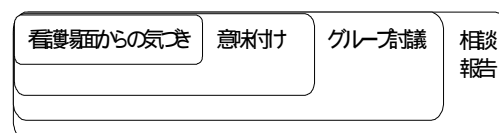


図2. 基本的な学習の階層(実習)

アクティブ・ラーニングを導入した研修会(図2)に参加した、経験の浅い訪問看護師(臨床経験1年未満)へ、参加後に学習方法や教材について聞き取りし評価を得た。

4. 研究成果

(1) 大学教育でのアクティブ・ラーニングに関する文献レビュー

大学教育のうち看護学部での実践報告が約50%(57件)と最も多く、医学部・薬学部・歯科医科学部が各約10%(12件)で、複数の学部での横断的な演習が約5%(6件)であった。教育方法として、チーム基盤型学習(TBL)が約20%(24件)と最も多く、次に問題解決型学習(PBL/PBLD)であった。多くが反転学習やジグソー学習を組み合わせで行っていた。学習管理システム(LMS)によるものは、3件のみであった。評価は、レポートなどの記述物や科目に合わせたピア評価・ルーブリック評価と様々であった。ARCSモデルや学習動機付け方略尺度MSLQ等を活用している文献も散見された。得られた結果から示唆を得て、教育方法は反転授業とジグソー学習、PBLの

混合、演習では動画による「体験型シミュレーション」で LMS 対応の教材が適切と思われた。

(2) 新卒訪問看護師を育むための課題と教育機関の役割

新卒訪問看護師を育むための課題は、【看護活動の場の広がりへの対応】や【土地勘の習得】が重要であり、【同期の切磋琢磨がない】という職場環境の課題が明らかになった。また、【人生観や価値観に添える力】を取得する必要があるとあり、教育者へは、【学習への積極的な動機付け】や学生が感じている【「世界」の気づき】と【引き出す関わり】が重要という意見が出された。

(3) アクティブ・ラーニングを導入した授業設計（教育方法や教材開発）と実施・評価

経験の浅い訪問看護師 14 名から、実際の訪問場面でのシナリオ教材から再現した訪問場面でのシミュレーションを通して、問題解決思考のプロセスや知識や技術の統合について、その評価を得ることができた。看護基礎教育における演習科目において、シナリオや動画を再考し「体験型シミュレーション」を実施し、現在、評価分析中である。

一方で、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が蔓延し、ICT を活用した新たな教育方法への転換が求められた。そこで、本教材の一部を活用してオンライン実習を感染状況に伴い組み入れ、その評価を学生によるルーブリック評価をもとに分析した⁷⁾。結果、看護の思考過程において、臨地実習と同等の学びが得られており、教材として効果的であった。

今後、新カリキュラムに含まれた「地域看護」の要素を「在宅看護学」でどのように教育していくか、主体的学習の視点から教材開発していく必要がある。

<参考文献>

1) 千葉県看護協会・千葉大学看護学研究科共同開発：新卒訪問看護師育成プログラム運用における学習支援マニュアル，公益社団法人千葉看護協会，2013.

2) ケアプロ株式会社：ケアプロ式新卒・新人訪問看護師教育プログラム，株式会社学研プラス，2017.

3) 多川晴美，輿水めぐみ，清水奈穂美：看護基礎教育で新卒訪問看護師をどう育てるか，訪問看護と介護，22（12），892-915，2017.

4) 平成 29 年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業：訪問看護事業所が新卒看護師を採用・育成するための教育体制に関する調査研究事業報告，<https://www.zenhokan.or.jp/wp-content/uploads/h29-2.pdf>（検索日 2018.10.25）

5) 宇多みどり，加利川真理，片倉直子：訪問看護ステーション管理者が望む新卒看護師の在宅看護実践力と採用意向との関連，第 37 回日本看護科学学会学術集会抄録，2017.

6) 宇多みどり，加利川真理，片倉直子：訪問看護師に求められる新卒看護師の在宅看護実践力に関する調査，報告書，2018.

7) 宇多みどり，片倉直子，丸尾智実他，：実習方法の比較分析からみたコロナ禍におけるオンラインでの訪問看護実習の学生評価，第 32 回日本看護学教育学会，2022.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大瓦 直子 (Oogawara Naoko) (30836854)	神戸市看護大学・看護学部・助教 (24505)	
研究分担者	丸尾 智実 (Maruo Satomi) (70438240)	神戸市看護大学・看護学部・准教授 (24505)	
研究分担者	片倉 直子 (Katakura Naoko) (60400818)	神戸市看護大学・看護学部・教授 (24505)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関